

富岡製糸

田島旧宅

高山社跡

荒船風穴

輝き増す4資産

絹の大衆化に貢献

県が2003年に旧官営富岡製糸場の世界遺産登録推進を表明してから9年、登録運動はまた一つ大きなハードルを越えた。

「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産登録の国内候補地の「暫定リスト」に記載されたのは07年。当初、構成資産は10件だったが昨年10月に県などが国際専門家会議を開き、富岡製糸場、田島弥平旧宅、高山社跡、荒船風穴の4件に絞り込

んだ上で、生糸の大量生産を実現した養蚕製糸の技術革新と技術の世界交流を重点にアピールしていくことを決めた。

構成資産の核となる富岡製糸場は、明治政府が殖産興業を掲げてフランスから器械製糸や工場建築の技術を輸入し、1872（明治5）年に開設。全国から集まった工女が製糸技術を学んだ。

民間払い下げ後の明治後期から大正期に、高品質で均一な原料繭を確保するた

め養蚕教育機関の高山社、蚕種（蚕の卵）生産の田島家、蚕種を冷蔵した荒船風穴と協定を結んだ。
これにより同一品種の繭供給の仕組みを構築するなど、生糸の大量生産システムを確立。全国にこの生産体系が広まり、日本の生糸生産は1930年代に世界市場の80%を独占して世界各地で絹の大衆化に大きく貢献した。



近代養蚕農家の原型となった「田島弥平旧宅」
|| 伊勢崎市境島村



全国に養蚕技術を広めた「高山社」
|| 藤岡市高山



天然の冷風を利用して蚕種を貯蔵した「荒船風穴」
= 下仁田町南野牧

